

学部で学んだ知識と技術をさらに深め 薬学の未来を切り拓こう。



薬学部・薬学研究科教授
安東 嗣修

薬学部教授・薬学研究科長
篠原 康郎

薬学部・薬学研究科教授
福石 信之

金城学院大学に薬学部薬学科が設置されたのは2005年。翌2006年には臨床を重視した6年制薬学教育を導入。以来、薬物治療の高度な専門性と、医療現場で必要な問題解決力を備えた女性薬剤師を数多く輩出してきました。そして2022年4月、6年間の学部教育を基盤とする4年制の大学院薬学研究科を開設。学部から大学院までの一貫した教育・研究体制が整いました。そこで大学院の設置に尽力した3人の先生に、大学院教育への思いや今後の抱負を語っていただきました。

—待望の研究科が開設され、学びのステージが広がりました。

篠原 大学は「研究」と「教育」が両輪にあり、大学院は研究を進める上での大きな推進力となります。薬学部の学生の中には上に進みたいという学生も毎年何人かはいて、他大学の大学院に進学したという経緯もあり、本学の大学院設置が待たれていました。研究科ができたことで、薬学の教育・研究活動により拍車がかかると思います。

安東 大学に入る前から「研究をやりたい」という学生がいます。しかし、本学の薬学部を選んで入学してきても、大学院がないために進路の選択肢が病院か薬局の薬剤師という2択に絞られていました。大学院の設置は、研究の道に進みたいと思っている学生に光を与えたと思います。

福石 ただ、今はやっと箱ができたという段階で、これから学生が優れた研究者として育っていくために、いかに豊かで魅力ある学びの場をつくっていくか。それが今の率直な思いです。

篠原 私も全く同じ思いです。ハードはできたので、ソフト、コンテンツを増やしていくことが極めて大事。気を緩めることなく、引き続き教育・研究体制の充実を図っていきたいと思っています。

—薬学研究科ではどんなことに力を入れていきたいと考えていますか。

安東 自分が携わっている研究が果たしてみんなの役に立つのか、立たないのか、研究と臨床のはざまを埋め、臨床につなげていく橋

渡しをすること。ただ面白そうだからとか、自分よがりの研究ではなく、常に臨床を意識した教育・研究を推し進めていくことが我々の使命だと思っています。

福石 僕は明確に創薬を念頭に置きたいと思っています。創薬というのは非常に困難な道なのですが、例えば一生のうちに医師や看護師さんが助けられるのは目の前にいる患者さんだけです。でも、今までにない、素晴らしいお薬をひとつ創れば、一挙に10万人、100万人、ひよっとしたら何千万人という人々を救うことができます。ただその一方で、日本では創薬研究を目指す人が少なくなっているのも事実です。資源がない日本だからこそ、そういう知的な財産をつくり、発信していけるような人材を大学院から輩出しなければいけないと考えています。

篠原 今、薬学を取り巻く環境が大きく変化する真只中にあります。創薬研究ひとつとっても、スクリーニング創薬からゲノム創薬へと推移し、抗体医薬を代表とするタンパク質医薬の台頭、さらに近年では核酸医薬、細胞治療、再生医療の研究開発も加速度的に拡大しています。コロナのワクチンにしても今まで実用化されたことがなかったものがいきなり実用化されるなど、創薬研究にはこれまでに類を見ないほど幅広く、かつ高度な専門知識が求められるようになってきました。こうした技術革新に対応し、追いついて、追いつくどころか、さらに新しいものをつくっていけるような人材を育成して、社会の要請に応えていく。それが私たちの務めだと思っています。

博士号を取得することで 進路の選択肢、活躍の場は多様に広がる。

—大学院を修了した学生は、どんな道に進んでいくのでしょうか。

篠原 大学院修了後の道は多様にあります。当研究科では基礎系から臨床系の分野まで、いろんなテーマを選べるようになっています。そこで何を磨いたかによってある程度決まってくると思いますが、例えば臨床系のテーマを研究した人なら、医療機関で高度な専門性を発揮できる薬剤師に、基礎を中心に勉強してきた人は、創薬に進んでいく道が拓けてきます。さらに薬学部のある大学で後進を育てる教育者という道も選択肢の中に入ってきます。大学の教授になるために必要なのは博士号で、これは国際的なライセンスでもあって、海外の研究者とも対等に話することができます。アカデミアであれ、医療の現場であれ、教育の場であれ、将来の選択肢は多様に広がっています。

安東 アカデミアの世界でいえば、今、女性研究者がすごく必要とされています。いろんな大学の教授募集を見ても、女性が欲しいという大学が多いんです。特に本学の院生は薬剤師の免許がある上で博士号を取るわけです。そういう人材はまだ少数なので、教育の場でも必要とされる人材です。これからしっかりサポートして、大学院を修了した女性がいろんな大学で活躍するという道をつくっていきたいと思います。

福石 アカデミアもそうですが、クリエイティブな世界では、「破壊」と「創造」が大事だと僕は思っています。例えば男性だけで固まっているような村社会があったとして、そういうところは女性にどんどん入っていただいて、良いところはもちろん残せばいいのですが、

悪いところは破壊して、女性の目線でどんどん新しい風を入れていく。大学もそうですが、新しい風を入れて多様化していかないと組織として活性化していかないし、学問的にも活性化していきません。そういう意味でも、優秀な女性研究者をどんどん世の中に送り込んでいきたいですね。

「薬学を学ぼう」という初心を 6年間ピュアに持ち続け、 そのまま大学院に進んでほしい。

—大学院進学を考えている方にメッセージをお願いします。

福石 大学院ができたことで、自分の未来へのカードがひとつ増えました。「薬学を学ぼう」と思って大学に入ってきたときの初心をピュアに6年生まで持ち続け、そのまま大学院に入ってもらえると嬉しいですね。私たちも、皆さんの研究活動を全力で応援します。

安東 大学院では、学部では学べない物事の考え方、課題解決に向けた調査・研究方法、結果に基づいた解釈など、多くのことを学べます。実社会では必要とされる能力ですが、身近に指導してくれる方はいません。このことを卒業後に実感して大学院に進学する方が多くいます。本大学院では基礎から臨床まで、経験豊富な先生方が多方面から指導してくれますので、一緒に頑張っていきましょう。

篠原 本学には大学院生を対象とした奨学金制度なども用意していて、経済面からのサポートもあります。また、社会人にも門戸を開いており、平日夜間や土曜日に履修できる体制を整えています。ひとたび研究室に入って研究を始めたら、私たち教授も学生も対等の立場。ともに薬学の未来を切り拓いていきましょう。



自分の手で、
新しい化学反応をつくる。
それが有機化学合成の
醍醐味です。

大学院薬学研究科1年 杉浦 雲母 SUGIURA Kirara

Master's Student

薬学研究科での学び

Voice

高校時代、歴史が好きで色々な文献を読んでいると、結核で命を失った著名人が多いことに気づきました。かつては不治の病だった結核が、今ではお薬で症状を抑えられる。その事実に興味を湧いて、薬学を学んでみたいと思うようになりました。

学部を卒業し、いったんは薬剤師として社会に出たのですが、他の道も探ってみたいという思いもあって大学院博士課程に入学。現在は「ロジウム媒体によるサリチルアルデヒドとエンイン化合物の分子間ヒドロアシル化反応の検討」というテーマで、種々のエンイン化合物を用いて反応を検討し、実用化レベルにまでもっていくことを目指して研究をしています。医薬品の多くは炭素原子から構成される有機化合物で、その多くが人工的に合成されています。研究に着手してまだ日が浅く、思うような結果は出ていませんが、根気よく実験を積み重ね、いずれは医薬品を作るときのプロセスにも大きなインパクトとイノベーションを与える

ような、新たな化学反応の開発をしたいと思っています。研究は地道な作業で大変でしょ、とよく言われますが、私はコツコツと手を動かすことが好きで、むしろ毎日ワクワクしながら、実験を繰り返しています。

院生として研究に没頭する傍ら、現在は助教として学部2年生の化学の実験のお手伝い、加えて週に2日、大学近くの医院の門前薬局で薬剤師の仕事も続けています。日々進化する臨床現場での薬物治療の実際や、MRさんから最新の医薬品情報が入手できるので、研究も、助教も、薬剤師もすべてつながり、プラスに働いています。

卒業後の進路はまだ決めていませんが、大学院で学び博士号を手にすることで、選択肢が広がるだろうと思っています。その日を楽しみに、今はひたすら研究に打ち込み、結果を出したいと思っています。